

すべては、
7人の哲学を
知ることから
はじまる。

What is the true prevention?



本当に正しいことは何か。 自分の目で確かめる、 変えていく。

越中 正人(こしなか・まさひと)

1979年大阪生まれ。神奈川県在住。2007年に発表したシリーズ「echoes」は「UBS Young Art Award」を受賞。「越後妻有アートトリエンナーレ」(新潟)、「WROメディアアートビエンナーレ」(ポーランド)など、国内外問わず活躍中。京都造形芸術大学・非常勤講師。
<http://www.masahitokoshinaka.com/>
本誌掲載写真は、個展「つまり“please”/please let me…」(2018年11月)で発表された作品。

取材場所は、東京の八丁堀にあるアートギャラリー。個

展開催中の越中正人さんにお会いしました。自分の表現したいこと、人から求められること。その両方に向き合うのが、たどりついた現代アートの世界。気になる7つの質問に答えてくれました。

作品のテーマは、
どのように
決めているのですか？

僕の源流となる大きなテーマは、「集合と個」なんです。集合というのは組織だったり街や国だったり。そこにどう人(個)が関わっていくかを軸に、毎回いろんな切り口で作品をつくっています。今回の個展は、「労働、働き方」に焦点を当てたものです。

テーマとして社会問題を取り扱うといっても、基本的には自分の身の周りで起きたことや友人のエピソードが創作の

きっかけになっています。

作家として大切にしていることはありますか？

日常生活のなかで、「なんですか？」という視点は常に持っているかもしれませんね。世の中であたり前とされている暗黙のルールやメディアの報道が必ずしも正しいとは限らない。「それって本当なの？」という違和感を大切にしています。実際に自分の目で確かめてみると、勝手な思い込みだったと気づかされることが多いです。おかしいものは変えていきたいし、もっと生きやすい世の中にしていきたい。そういう想いで作品づくりをしています。

創作活動を続けるための
原動力って何ですか？

きつと負けず嫌いな性格とコンプレックスだと思えます。たぶん子どもの頃から何かし

らうまくいってなかったんでしょうね(笑)。それが逆に「なにくそ！ 自分にだってできるんだ」「もっといいものつくってやるぞ！」という力になってるのは確かです。

たとえば芸大をいくつも受験しましたが、ひとつも受かりませんでした。今振り返るとそのときの悔しさが発端となって諦めずに作品をつくり続けてこられたと思います。

18歳の頃、最初は絵を描いていたんですけど、そのうち資料のために撮っていた写真が面白くなって。もともと現代アートをやりたかったというより、趣味の延長線上に今があるという感じです。

今の自分をつくるうえで、
忘れられないエピソードが
あったら教えてください。

小学校1年生の入学式のあと、ワクワクドキドキ胸をふくらませて教室に行くじゃな

いですか。そしたら僕の机の上に「えっちゅう まさこ」って書いてあって。え？ 苗字も名前も間違ってるやん！って。それを見たときニューヨークで泣きました。なんで先生は確認しなかったんだらうって。

大人になって話すとき笑い話になりますけど、僕のなかではブチトラウマです。ある意味、それがきっかけで正しいことへのこだわりを持つようになったかもしれません。

活動を続けるなかで、
やりがいを感じるの
は、どんなときですか？

作品には自分の意見や考えが詰まっているので、共感してくれたり心動かされたという声を聞くとうれいいます。その反響が大きかろうが小さかろうが、やってよかったなあって。反対にそうは思わないという意見があっても、それはそれで受け止めます。



Masahito
Koshinaka

Special Interview

新創刊号を記念して、
特別インタビューをお届けします。
違う世界で活躍する人の想いや考え方には、
歯科衛生士も共感できる
働くヒントがいっぱいです。

現代アート作家

越中正人さん



「何かを変える！」
同じことをしていたら
次の道は開けない

編集部より

とっても気さくに話してくださった越中さん。現代アート」と聞いて、「難しそう、私にわかるのかしら？」と思ったのも固定概念にすぎなかったと気づかされました。

世の中であたり前とされていることが本当なのか？ その疑問を持つこと、発信していくこと。それが目の前の人を、さらには社会を変える第一歩だという越中さん。その生き方、考え方は、予防歯科の世界を変えていこうと願う私たちの想いとも重なります。

「年をとると歯は抜けるもの」ではなく「年齢に関係なく歯は守れるもの」へ。歯科衛生士が日本人の思い込みを変えていけたら、もっと健康で幸せな人を増やせると実感するひとときでした。

正直、自分の作品が100%
観てくださる方に伝わるとは
思っていません。どうしたらいい
のかなと、毎回試行錯誤の
連続です。

行き詰まったときは
どうやって
乗り越えていますか？

もちろんうまくいかななくて
心が折れそうになることもあ
りますよ。でも、自分のした
いことを自分で選択している、
という自覚があるので苦では
ない、頑張れます。
それでも行き詰まったとき
は悩まずに一度そこから離れて
違うことをするとか、つき合

う人や環境自体を変えちゃう。
ポジティブに考えてとにかく
行動するのが、長く続ける秘
訣ですね。また一からスタート
できます。

今、どんなことに
挑戦していますか？

僕の作品は、写真がいくつ
か重なっていてパッと見、表面
だけではわからない情報もい
ろいろ詰まっているんです。今
回の作品も幻想的な蜘蛛の糸
があって、その後ろには糸を
せつせとつくる女郎蜘蛛がい
て。目に見えるものだけが真
実ではない、というメッセージ
も込められています。

それをわかりやすくするた
めに、今回の個展では新しい
試みをしました。ARの技術
を活用して、写真にタブレッ
トをかざすと隠れた背景や制
作工程が見られるようにした
んです。作品の見方や印象が
だいぶ変わったと思います。

今後は、新しい技術を活用
しながら鑑賞と体験を行った
り来たりできる作品をつくっ
ていきたいですね。今まで
と同じことをしていても道は
開けない、という言葉を肝に
銘じて。アートという手段を
使って世の中を少しでもいい
方向に変えていけたら、活動
を続ける価値があると思っ
ています。

『つまり“please”/please let me…』

前景の写真は、テニスラケットに張り巡らされた蜘蛛の巣を拡大して加工したもの。実際にアトリエ近くにいた蜘蛛を捕獲し、巣をつくらせたそうです。その背景には『きかんしゃトーマス』をイメージして書き起こした絵が隠されています。作品にタブレット（AR）をかざすと絵が動き出し、セリフが流れる仕組みです。

